



とうえい

令和3年9月6日
東栄小学校
学校だより第5号

心が動いた瞬間 ～負けた時の心～

夏を惜しむひぐらしの声に、ひとときの涼を感じる季節となりました。

さて、国立競技場に灯された聖火のもとで、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されました。日本人のメダルラッシュに沸き、一喜一憂しながらテレビ観戦をしていました。勝っても負けても心が動き、揺さぶられ、時には「じ～ん」として涙があふれることもありました。

カヌースラロームで2大会連続メダルに挑んだ愛知県出身の羽根田卓也選手は、決勝で攻め抜いたものの10位という結果に終わり、再び表彰台には立てませんでした。決勝後のインタビューでは、「この日に人生を懸けてきた。全力を出し尽くしたので結果を受け止めたい。一生懸命やってきた自分の挑戦は今日で一区切りです。・・・」と述べていました。カヌーを全力で漕ぎきった姿には、芯の強さを感じました。



日本女子バスケットボールチームは、機動力を生かしたプレイで予選リーグから快進撃を続け、決勝の舞台にたどり着きました。決勝の相手は平均身長が10cm以上も高いアメリカでした。日本はアメリカの高さに攻守ともに圧倒され、シュートを打たせてもらえない場面が多々ありました。それでも日本は豊富な運動量を生かした守備と、3ポイントシュートをねらって高さの不利を補い、世界を驚かせました。決勝後のインタビューで選手たちは、「これだけ頑張っただけで負けたのだから、自分たちが弱いのではなく、相手が強かったんだ。・・・」と述べていました。自分を責めるのではなく、まずは自分の頑張りを認め、相手を尊敬しながら「負け」を受け入れることで、次へのステップのエネルギーが湧いてくると思います。



個人競技の世界で考えると、勝ち抜き戦によるトーナメントでは、一度も負けずに頂点に立てるのは1人だけしかいません。100人参加すると、99人はどこかで「負け」を経験します。世の中に出ても様々な形で競争はあります。子どもの頃から競い合うことを適度に経験させることは大切であり、「負け」を心の中で整えていくことは、たくましくしなやかに生きていく上で大事なスキルだと思います。

～創立70周年今昔物語その4～

昭和36年当時の運動会では、白い足袋をはき、腰に手ぬぐいをかけて参加していました。準備運動を行っている様子です。

(昭和36年)



(校長 井田 寿)